庄司 薫

さよなら 快傑黒頭巾

みんなを幸福にするために、強くやさ
しく勇気ある男になるために、薫クン
はいま何をなすべきか。話題の快作

薫クンシリーズ第2作

¥38

さよなら快傑黒頭巾

庄司 薫

中央公論社

さよなら快傑黒頭巾　©1969 検印廃止　定価380円
昭和44年11月25日　初版　昭和45年4月10日　6版
著者　庄司　薫　発行者　山越　豊　印刷所　三陽社

発行所　中央公論社　東京都中央区京橋2—1 電話(03)(561)5921(代)

さよなら快傑黒頭巾

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

ぼくは時々、男の子が生きていくってのには相当にややこしいところがあるらしいとしみじみ思う。たとえば母やなんかの話から推察すると、ぼくというのは赤ちゃんの時から相当に「お目覚め」のいい御機嫌なところがあったらしいのだが、どういうわけか今でもかなりそうなのだ。そして雨ニモマケズ風ニモマケズいつでも朝の七時には元気に「お目覚め」ってわけで、こういうのは男としてなんとなく滑稽みたいな感じがしてしまう（ほんとに時々「コケコッコー」ってやりたくなるほどだ）。つまり、ぼくの二人の兄貴が大学生だった頃なんかを思い出すと、連中は二人ともいつ寝ているんだか、或いはいつ起きているんだか分らないようなところがあって、特に朝なんてのはいつも御機嫌斜めで、宴のあとっていうか戦いのまえっていうか、とにかく「人生という兵学校」は男にとってキビシイよ、みたいなカッコいい様子をしていたものだ。ところがぼくときたら、まあ大学生にならなかったせいかもしれないが、いまだにきちんととび起きて、おはよう、ああおなかがすいた、なんて感じのことをやっている。もちろんこういうのは、文部省かどこかに教えたら褒めてくれそうな健康で文化的な生活かも知れないし、ぼくも別に悪事を働いているとは思わないのだが、問題はそろそろ一人前の男として考えると、どうもこうい

うのはサマにならないというかうしろめたく感じてしまうというところにあるのだ、ほんとうにややこしい。

ただ、これは男にきり分らないことと思うのだが、ぼくみたいな健康な十八歳の「男の子」が、朝目を覚してすぐパッと起きるというのには（威張るわけじゃないが）相当の努力というか気力みたいなものがいるといっていいと思う。つまり、こういうのはなんていうか、すごく単語の使い方が難しいのだが、つまりぼくたちは朝目が覚めるといつもこうすごく張切っているというか要するにタッチャっていて、猛烈感じやすいみたいなところがあるわけなんだ。まあ、ぼくたちなんて言ってみんな道連れにするのはやめるけれど、少くともぼくにとっては、朝目を覚してそしてすぐパッと起きるというのが、時には生命からがらの大事業みたいに思われる時がある。もっとも考えてみれば、今のぼくなんかはこの問題に関してはもう相当のベテランみたいなところがあって、この難関を切抜けるいわば「傾向と対策」について（何しろ毎朝やっているんだから）、恐らく東大受験なんかメじゃないほど詳しくなっているようにも思う。たとえば前には英語の単語集なんかを毎晩抱えて寝て、目を覚したとたんに「アバンダン＝捨てる、見捨てる、断念する！　やめる！」なんてよくやってた。もっともこの場合はなるべく綴りの長い難しい単語がいい（それから、ぼくはつくづく身にしみたことだけれど、単語というか言葉の中には、時にとてつもなく妄想をかきたてるものもあるから気をつけないといけないんだ）。それからぼくは去年の秋からずっと、単語集に似ているということもちょっとあって『毛主席語録』の縮刷版を抱えて寝て、目覚めたとたんに「世界はきみたちのものであり、また、われわれのものでもある。

しかし、結局はきみたちのものである。きみたち青年は、午前八時、九時の太陽のように、生気はつらつとしており、まさに、旺盛な時期にある。希望はきみたちにかけられている。」なんて一節ずつ一生懸命学習してみたのだが、これはかなり効果的だった。ただし、たとえばこんなのにぶつかった朝はこれはちょっと相当に困ってしまった。「『しっかりとつかむ』必要がある。つまり、党委員会はおもな工作をかならず『つかむ』必要があるばかりでなく、かならず『しっかりとつかむ』必要がある。なにごとによらず、しっかりとつかんで、すこしも緩めないようにしなければ、つかんではいられない。つかんでも、しっかりつかまなければ、つかまないにひとしい。手のひらをひろげていたのでは、もちろんなにもつかんではいられない。たとえ手を握っても、しっかりと握りしめなければ、つかんだようには見えても、やはり物をつかんではいられない。われわれの一部の同志は、主要な工作をつかむにはつかむが、しっかりとつかまないために、やはり工作がうまくやれないでいる。つかまなければだめだが、つかんでも、しっかりつかまなければ、やはりだめである。」

これは念のため言っておくけれど、もちろん原文のままなんだ。もっともこの時は（すごく不謹慎だってことは分っているのだが）どうしても笑いがとまらなくなってしまって、結果的には実に見事に難関を切抜けることができたわけだ。そしてこの経験からも言えるのだが、こういう「朝の難関」（夜もそうだけれど）を突破する方法としては、難しい単語や本をにらむとか、健康上の配慮をするとかいったまともな方法（？）もいいけれど、ユーモアの感覚みたいなものが相当効果的なのじゃあるまいか。つまり、目が覚めて猛烈な誘惑を前にした時、たとえばたった今

全世界の（もっとも時差があるから、「全日本」ぐらいにすべきかもしれない）何十万何百万というぼくみたいな連中が、一斉に同じ大問題というか大誘惑に襲われて、旧約聖書中の人物の真似をするかどうかソワソワしており、一部の同志は、重要な工作をつかむにはつかむが、しっかりとつかまないために、やはり工作がうまくやれないでいたりする、なんてことを思いうかべてみたりするわけだ（これはほんとに、一度だまされたつもりで試してみるとすぐ分ると思うけれど、まあちょっとした手だと思うよ）。

それにしても、ぼくは時々しみじみと思うのだが、この毎朝の難関だけでなく、セックスの問題というのは、ほんとになんてまあ空しくも（？）ややこしいものだろう。また毛主席に頼れば「きみはその問題を解決することができないのか。それなら、その問題の現状と歴史を調査することである。十分に調査してはっきりとさせれば、その問題にたいする解決策が出てくる」はずなのだけれども、それがこの場合にはどうもうまくいかない。ぼくは、小学校一年生の夏休みの絵日記以来（この絵日記ではドンていう仔犬のことばかり書いて、先生に笑われちゃったのだが）ずっと、すごくムラはあるけれどとにかく日記みたいなのを書いていて、その中には今冷静に読んでみると要するにこのセックスをめぐる戦況報告のようなものが相当にあるわけだ。そして、特に中学生になってからは、ぼくが奮戦空しく「聖書」にならっちゃったはしたない時なんかが暗号で分るようになっていたり、時には自己批判とかなんとか、つまりまあいろいろ面白いのだが、こういうのをいくら調査してもどうも何もはっきりしてこない。つまり、たとえば雑誌やなんかの身上相談でよく、スポーツや勉強に専念してエネルギーを発散させなさい、なんての

があるわけだが、少くともぼくの調査と経験では、そういうのは全然無関係らしいのだ。いくら一生懸命勉強してもテニスやなんかでフラフラになってもカッカする時はするんだし、逆にホイホイ怠けていてもすんなりパスできる時はできるんだし……。

もっともこの旧約聖書の方はまだ戦う余地というか頑張る余地があるからましかもしれない（もちろんそう頑張る必要はないって本なんかには書いてあるわけだが、ぼくにはどうもつまらないところでやたらと頑張る変てこな趣味みたいなものがあるらしいのだ）。問題は、なんて言うか要するに夢を見てしまう方で（あーあ、ほんとうに言い廻し考えるのに骨が折れちゃう。ぼくは別にお上品ぶって術語を使わないんじゃなくて、なんとなくそういうのがいやなんだ）、これはほんとうにお手あげだ。つまり「聖書」の方は、たとえば考えることにしても自分でそれなりにコントロールできるというか、要するに（おかしな言い方だけれど）自分の気持に敬意を払う余地（？）みたいなものがあると思うのだが、「夢」ではもちろんそうはいかない。だから、その「聖書」にしても「夢」にしても、たとえばその考えていた女の子に出会いがしらにバッタリなんてことになるとこれは相当のオタオタというかショックなのは同じだけれど、「夢」の方は（特に夢ってのは正直だという説が本当だとすると）これは問題が大きいわけで、時には全くその女の子の前で居ても立ってもいられないような気がすることもある。それに白状すると、その夢に見る女の子にも相当いろいろあって、時にはとんでもない思いがけない女性なんかが現われたりすることもあるんだから大変だ。しかも困ることには（？）、どういう場合に思いもかけない女性が闖入するかってことも分らない。つまり、デートとかゴーゴーパーティなんかですご

く感じちゃった女の子がすぐ出てくるとか、テレビで映画を見てソワソワした晩、そのマリリン・モンローがぼくを誘惑するとかいった簡単なことにはほぼ絶対にならないのだから。

でも正直に言うと、そのハプニングみたいなところがまたえらく面白いような気も実はする。そして考えてみれば、ぼくが『毛主席語録』やなんかで、「聖書」の方では相当に頑張ってエネルギーを節約（？）したりするのは、或る意味ではこの「夢」の方を大いに楽しみにしているせいじゃないかといった感じも若干はあるわけなのだ。まあどっちにしても、こういうのは「同志」の間だけの話で、とても女の子なんかには聞かせられないサエない話だとは思うけれど。いや、実際問題としては、男「同志」でだってとてもサマになる話じゃないだろうし、さらに考えてみればもともとどうしても誰とも話し合ったりできることじゃないようにも思う。よく新聞の家庭欄なんかに性教育はまず母親が責任を持って、といったことが出ているけれど、冗談じゃない。まあ世の中にはいろんなママがいるのだろうが、少くともぼくの場合は、もし母に、薫さん、いらっしゃい、なんて呼ばれて、なんて思っただけでもう確実に気絶だ。もっともぼくの場合は、幸運にも彼女の方が先に気絶しちゃうだろうから問題はないけれど。だから、大岡越前守っていうのは、いくら仕事熱心にしてもちょっとこれはすごいと思うわけだ（だって彼はママにきいたんだからね、火鉢の前で……）。

なんだか最初からいたずらに空しいような（？）変てこな話になっちゃったが、でも正直のところこういうことは、ぼくにとって日常的っていうか「朝な夕な」にっていうか、まあ要するに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

相当に切実な関心事であることは残念ながら確かなんだ。そして実を言うとその朝も、ぼくは相当のピンチに見舞われてオタオタしてしまった。つまりぼくは七時に一応は目が覚めたのだが、前の晩（というか朝）三時すぎまで本読んで起きていたこともあってなんとなくまだ眠かったし、それになにしろ三日続きの連休の真ん中の日曜ってことのせいかすっかりたるんでいて、起きようかまた眠っちゃおうかなんてモーローとしていたのだ。そして、分ると思うけれどこういう時がつまりは一番危い。つまり頭もからだもボーッとしているなかで、「朝七時の旺盛な太陽」みたいのだけが生気はつらつとしているわけで、どうしても「希望」はそこに集中するような感じになっていくんだからたまらない。ぼくは辛うじて一番手っとり早い呪文である「庄司閑居して不善をなす」（つまり小人閑居して、だ）なんてのをチラリと頭にうかべたけれど全然ききはしなかった。さあ困った、どうしよう、「風吹かば即ち倒る」かな……。

でも幸か不幸かその時ぼくは、ベッドの頭のところのソニーのデジタル24という目覚しラジオの七時のニュースが、「どっとくり出した行楽客」のことを伝えだしたのにふと気がついた。十二年ぶりの三日続きの休日とあって各行楽地はどこも記録的な人出となり、そして各地で交通事故が激増し、初日（五月三日）だけで死者五十何名、一番多いのは新潟県の七名で……、オヤオヤ。そしてぼくは、アナウンサーがいかにも真面目くさった口調で伝え続ける「マイカーが十キロ以上もつながって身動きできない高速道路」とか、「立錐の余地もないラッシュアワー以上の行楽列車」とか、「銀座なみの雑踏ぶりの観光地」とかいった話をききながら、なんとなくおかしくなってきたわけなのだ。どう言ったらいいのだろう。つまりぼくはかなり前から、この連休

とか夏休み冬休みなんかの行楽シーズンの模様を伝えるテレビや新聞を猛烈興味を持って見てきたのだが、これは何度見てもあきないようなところがどうもあるのだ。つまり、今もラジオがやっていたマイカーの列や満員の行楽列車を初めとして、海も砂も見えない海水浴場とか、ふもとから山頂までゾロゾロ行列したハイキングコースとか、川の両岸に垣根みたいにならんで糸を垂れた釣り人たちとか、そして交通事故・遭難・迷子・紙屑の山・疲れ果てたパパとママ・同じく疲れ果てた若者と子供・居眠り・あくび、「お巡りさんも汗だくだくでした」……。ただどう言うのかな、ぼくはこの頃は、なんとなくそういうのを笑ってはいけないような気がしているのだ。このぼく自身が、実は相当「どっとくり出す」のが好きだというせいもあるけれど、ただそれだけじゃなく……。

そしてぼくは、(すごく唐突な話だけれど) ふとマルクスのことなんか思いうかべたりしたのだ。つまりぼくは、少し恥ずかしいのだが今頃になってマルクスを一生懸命読んでいて、そしてつい最近『ドイツ・イデオロギー』なんてのを読んだばかりなんだ (恥ずかしいというのは、ぼくの出た日比谷高校の革命派なんかは、みんなとっくにマルクスなんてのは卒業していて、マルクスなんか古いって言うわけだ)。そしてその『ドイツ・イデオロギー』の中に、何かあったんだ。朝には狩りに出かけて午後には魚釣りして夜は芸術を批評して、といったすごく自由でレジャーでいっぱいのような生活の話が。ぼくはそこを読んだ時、ちょっとなんとなくエピスダイコクの七福神なんかを思いうかべたけれど、でもすごく心を動かされてポーッとしたようなところがあった。そして恐らくはそのせいで、その「どっとくり出した行楽客」のニュースをぼんやり

ときながら、突然、マルクスが生き返ってきてこの光景を見たらどんな顔するだろう？　ってことが頭にひらめいたのだと思う。ほんとに彼はどう思うだろう？　彼の愛した労働者というか人間たちが、なんていうか、つまり今日はこれ明日はあれとしたいことをいろいろやって、海に山にどっとくり出して、狩りに釣りどころじゃなく、それこそありとあらゆるあの手この手で楽しんで、もちろん夜はテレビの前なんかで批評をして（ソ連なんかだって相当にそうらしいんだなあ）。

そしてぼくは、枕に頭をうずめてしばらくクスクス笑っていたものだ。マルクスはシェイクスピアを暗誦していたというから、ひょっとすると「ホレーショよ」なんてやるかもしれない。「この天地の間には、われわれの哲学ではとうてい考えおよばぬことが沢山あるものだよ」なんてね。いや「ホレーショよ」じゃなくて「エンゲルスよ」かな、それとも「ジェンニィよ」かな、どっちかな、やっぱりエンゲルスかな……。

でも、今でもはっきり思い出すのだが、しばらくそんな具合にいろいろ考えていくうちに、ぼくは次第になんとなく淋しいようなショボクレたような気持になってきたのだ。何故だかはほんとによく分らないのだが、恐らくはぼくがマルクスをすごく好きだということに関係があると思う。つまりマルクスは、一生かかってすごく貧乏して病気して子供に次々と死なれて苦労して、でも元気に一生懸命に、顔をみたこともない人たちのため、つまりみんなの幸福のことを考え続けていたのにちがいないんだっていうようなことを、ぼくはよくふっと考えるのだ。そして、それなのに、どう言うのか、要するに結局は「ホレーショよ」なんてことになったりするとすれ

ば……。

そしてぼくは結局一時間近くもそうやってベッドの中でぼんやりのびて、つまんないことをあれこれ考えていた。ほんとうにつまらないとりとめもないこと、たとえばマルクスが大英図書館に毎日ショボクレたかっこうで通って勉強していた頃のことやなんかを……。そんな或る時白いドレスを着た細っこい「水仙みたいな若い娘(ヤングレディ)」が、その大英図書館にやってきて何やらデカい本を開いて一生懸命勉強を始めたのだ。そしてマルクスは(もちろん彼はすごくせっせと研究していたわけだが)、その若いきれいなレディが一体何をあんなに熱心に勉強してるのかなんとなく気になってしまったのだ。でも当時のイギリスは今とちがってそんなホイホイした雰囲気じゃないから、マルクスはもちろん「お嬢さん」なんて気安く声をかけてきくわけにもいかなかった。そしてそうしているうちに三日たち、その娘は研究を終ってもう来なくなってしまったのだけれど、それからしばらくした或る日、たまたま彼女の調べていた本が『長老派教会(プレスビテリアン)に伝えられたるバラの栽培法について』だったってことがマルクスに分るんだ。そしてマルクスはすごく嬉しくなってしまって、図書館中を口笛吹いて歩きたいような気分になって、ね?……。

気がついたらいつの間にか八時のニュースになっていて、ぼくの「朝八時の旺盛な太陽」は依然として「希望」に燃えてはいたけれど、でも変な言い方だが「もう一つ」元気がないというか、つまりはどうやらピンチを乗り越えていることが分った。ぼくはサッサと起きあがって、窓のカーテンを開けた。このところずっといいお天気で、きのうなんかは夏のように暑かったけれど、

きょうもすごい快晴で目の下に広がる庭いっぱいのみずみずしい若緑が、朝の空気を爽やかに染めていた。ぼくはしばらくうっとりと庭を眺め、それからほんの二分ほどヘラジオでちょうとやっていたハイドンの「軍隊交響曲」に合せて)、とてもひとまえでは見せられぬような猛烈な柔軟体操をやり、それから今度は三十秒でパジャマを脱いで半袖のポロシャツとGパンに着換えた。

階下(した)におりていくと、台所で女中のヨッちゃんが女性週刊誌を読みながら一人で食事をしていた(言い遅れたが、父と母は知り合いの結婚式の仲人をしにきのうから京都へ行っていて、ついでに「どっとくり出した行楽客」をやっているのだ。まあ、もうどっちみち老兵だからいいんだな)。そしてぼくは、いい香りをたてている味噌汁の匂いをかいで、ついまた言ってしまった。

「おはよう、ああおなかがすいた。」

2

ところで（ここがこのところのぼくの泣き所みたいなものなのだが）食事して新聞を読んでしまうと、ぼくはもう何もやることがなかった。もちろん逆立ちするとかテレビを見るとか「お勉強」をするとか、つまりなんでもよければいくらでもやることはあるのだが、ぼくのいうのはそういうことじゃないのだ。つまり、どういうのだろう。とにかく、何もやることがない、何も、なあんにも……。

ぼくは、ちょっと女中のヨッちゃんの女性週刊誌を借りて読もうか、なんて考えた。彼女は、相当のお金持というか（なにしろ働いているんだから）とにかくお小遣いを沢山持っていて、週刊誌だけでも毎週五冊か六冊は買いこんでいるのだ。つまり、女性週刊誌四つの他に、『週刊平凡』とか『週刊明星』とか時には『少女フレンド』なんてのもあって、そしてこういうのを時々読むってのは、打明けていうとえらく面白くて、時間のたつのも忘れて何時間でも読んでしまうほどなのだ。

でもぼくは、彼女がいかにものんびりと鼻唄を歌いながら台所であと片附けしているのを考えて、やっぱり女性週刊誌はあきらめることにした。何故なら、こんなひまな時にぼくが女性週刊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com